

***京都府教育委員会教育長賞**

「障害のある人と共に暮らす社会」

木津川市立木津第二中学校 2年
村 松 拓 実

「障害のある人の気持ちが分かるように接したい。」これは私が人と関わる際に、大切にしていきたい思いです。

私が3歳のとき、父は仕事でアメリカに行くことになり、しばらくの間、母親と私の2人で暮らしていました。その時期、母方の祖父が倒れ、介護をするため祖父母の家で生活することになりました。祖父は脳の病気で、海馬という場所に病気を発症し、高次機能障害と診断されました。日を迫うごとに記憶が出来なくなり、新しい事は全て上書きできなくなりました。優しくて、おだやかだった祖父は別人のようになりました。記憶だけでなく、色々な日常生活にも支障が出て、祖母や母が振り回されていました。大好きだった祖父のことが怖い存在に思え、だんだん嫌いにさえなりました。

私は14歳になりました。今なら祖父のひょう変ぶりを、理解できる気がします。当時の自分の態度を後悔さえもします。2年後に祖父は肺ガンで亡くなったのですが、障害のあった祖父をいたわるどころか、正直関わりたくないだけでした。何もしてあげられませんでした。

先日、認知症サポーターの方から「認知症の人達には明るく接し、間違っただけを話していても否定せずに聞いてあげる事が一番の特効薬だ。」と教えてもらいました。祖父は認知症ではありませんでしたが、同じような障害でした。障害のある人達と関わるのが怖いから苦手だとか色々な偏見をもつ人が多いと思います。私も身内がそうなってはじめて「障害」を身近に感じたので、大変な事も分かります。けれども、障害のある人達のサポートの中で、健常者の私達にしかできないこともたくさんあると思います。だから、責任を持ってサポートしていくべき、これは義務であります。

また、障害のある人達に親切にするのは当然ですが、一歩ふみ出す勇気がないという人もたくさんいるのではないのでしょうか。実際、身内にはできても他人にはできているか自分自身も分かりません。先日、京都駅の混雑した階段で、目の不自由な人がツエをついて階段をゆっくり下りていました。ぶつかりあう階段で不安だったと思います。でも私はその人の手を取ることも出来ず、遠くから見届けるだけでした。サポートしたい気持ちはあっても、実際行動に移すのは本当に難しいことです。手を取って目的地まで一緒に行くのが親切なのでしょうが、せめて危険な階段を下まで手を引いて下りる事ぐらいは出来たのではないかと後になって後悔しました。ツエがあるから、大丈夫だろうという意見は私達健常者の「逃げだ」と思います。例えば、手を引かなくても「下まで下りられますか。」と声かけするだけで

も、その目の不自由な人にとっては嬉しい言葉なのではないでしょうか。誰かが気にかけてくれているという気持ちだけでも大きなサポートなのではないでしょうか。

もし、車いすに乗った人がいたらあなたはどう感じますか。また、その車いすの人が高い所にある物を取れなさそうにしていたらあなたはどうしますか。優しい対応をするために何より大切なことは、私達一人一人が理解の心を持つことです。障害のある人達が少しでも不自由なく暮らしていくためには、私達一人一人の気づかいや思いやりが必要であり、それを行動に移せるようになったら、素晴らしい社会になるでしょう。例えば、自分の住んでいる町ならば、道案内をすることもできます。また、「どうしましたか。」とたずねることぐらいなら私達中学生にだってできることではないでしょうか。そのようにしてあたたかい人間関係が築かれていくのです。

人として生まれたからには、お互いを支えあいたいです。そして人と人がもっと関わりあえば、誰もが暮らしやすい社会に変わっていく。私はそう信じています。